



記者体験ルポ……隈取り

今日の先生

立花志十郎さん  
1976年、神戸市生まれ。日本舞踊宗家立花流師範。大学でたまたま勧誘されたサークルで歌舞伎にほれ込み、国立劇場歌舞伎俳優養成所で学ぶ。東京・歌舞伎座など大劇場での経験を経て、現在は全国の学校で講演

歌舞伎といえば、まず「隈取り」が思い浮かぶ。顔に赤や青の筋を引いた独特の化粧は強烈な印象を与える。歌舞伎の象徴ともいえる隈取りが気軽に体験できると聞き、記者(32)は都内の倉庫会社が行っている文化事業「歌舞伎太郎」の「くまどり見学会」(4月19日)に参加した。隈取りを施すと気持ちに変化が起きて…。(原田晋也)

立花志十郎さん(左)に隈取りをしてもらった原田記者(右)は、いずれも東京都中央区で



「歌舞伎では登場人物の性格を見た目、せりふすべてにおいてはっきり描き出すことが大事。隈取りをしている人は、普通よりも飛び抜けて正義感が強いとか、あるいは常人を超えて悪いとか。それが顔に現れているという考え方なんです」

取りは顔の血管や筋肉、陰影などを強調しており、赤は正義、強さ、熱血、善などを、青は冷酷さ、悪などを表す。茶色など、赤でも青でもない場合は人以外の妖怪などを表す。

東京・日本橋の歌舞伎太郎事務所。講師の立花志十郎さん(左)が、さまざまな隈取りが登場する時代物(江戸期より前の時代)や人物の世界に題材を得た作品の名作「菅原伝授手習鑑」を例に解説していた。隈

色や様式 先人の知恵



隈取りをしてもらった歌舞伎独特の「六方」の動きを教わる

スーツですが… 超人気分!

次に、水に溶かしたおしろいを塗り、パフで水分を拭き取る。こうすることでおしろいが油とくっついて顔に定着する。ここまでは京都の舞妓の化粧と全く同じだという。

次は筆で赤い筋を書く。筋はむやみやたらに書くわけではなく頬骨に沿っている。書き順は特に決まっておらず、後で指でぼかすので丁寧に書かないほうがいいとされている。ぼかすと舞台上で迫力が出るので、役者の間では「近くで見た時ちょっと汚いくらいにしろ」と言われるという。

約三十分ほどで熱血漢を表す見事な「筋隈」が完成した。この顔のまま、東西南北天地の六方向に手足を動かす歌舞伎独特の歩き方「六方」に挑戦。もは



や歌舞伎指導をしている。歌舞伎は難しく思われがちだが、「江戸時代の普通の人が見て楽しんでいたので本来は難しくなくて面白く見てもらえるかをお伝えしたい」と話す。

歌舞伎太郎は、くまどり見学会のほか、歌舞伎入門講座や観劇会も開いている。問い合わせは歌舞伎太郎事務局(TEL:03・6262・5151)へ。

や気持ちは歌舞伎役者だ。気分がよくなり「普通よりも飛び抜けて」勇気が湧き、そのままの姿で立花さんに話を聞いた。立花さんは、歌舞伎の洗練された様式のすごさを強調する。「浅知恵で手を加えようと思っても『なるほど、だからこの衣装でこの化粧なんだ』と思うことばかり。古典歌舞伎は何百年もかけ多くの人が知恵を絞って作り上げているので、全然いじるところがないんですよ」

そうか、今の自分の顔には何百年にも及ぶ人の知恵が塗り重ねられているのだ。そう思うと何だか「常人を超えた」感覚に見舞われて気が大きくなり、化粧を落とさずそのまま地下鉄に乗って会社に戻った。車内で外国人観光客らしき家族がこちらに気付き目をむいていたが、舞台にいるような気分になった。

◇ 四月十九日に東京メトロ銀座線や霞が関周辺でスーツに隈取り顔の不審な男を見かけた方、それは私です。

それは私です。